

「宿住（前世での住）を考察する第九章」

法とプトガラをそれぞれ分けて説く>プトガラ（人）の無我を説く>プトガラ（人）が本性として成立したことを否定する>章の著述を説く> [対論を述べる]

ここで、「その如く近取を知りたまえ。業（行為）と行為者を除いた故である。1」と言ったことは正しくない。このように、

視るや聴く等や、
 感受する等をも従えた
 ものである、それらの
 以前にそれが有ると、或る者は言う。 1

「近取者である者が近く取るものである、視る（もの）や、聴く（もの）や、嗅ぐ（もの）や、味わう（もの）等や、感受作用や接触や作意等の（所有者である）その近取者は、それら近く取るものの以前に有る。」と、正量部は言う。何故かといえ、斯くも、

事物が有るのでなければ、
 視る等と如何様になろうか。
 それ故に、それらの以前に
 その留まる事物は有る。 2

ここで、存在するとなった祭祀が財宝の収集をするけれども、存在するのではない石女の子が（財宝の取集をするの）ではない。その如く、もし先ず、『視る（もの）』等の以前にプトガラが留まるとなっていなければ、それが『視る（もの）』等を近く取ることにも全くなならない。それ故に、財宝の以前に祭祀が留まるように、『視る（もの）』等の以前にこれを近く取るものである、そのプトガラは有るのである。」と、言う。

章の著述を説く>それを批判する>近取者が自性として有ることを否定する>他派が考察した我を否定する>取る者が、取られる対象一切の以前に有ることを否定する>

[取られる対象より前であれば、「取者」と名付ける因（理由）が無いことで否定する]

述べよう。

1 その如く…である。：『根本中論』第8章13偈。

視るや聴く等や、
 感受する等、まさしくそれ
 以前に留まる事物。
 それは、何によって名付けられるであろうか。 3

「〈プトガラ〉というものは、視る（もの）等の以前に有る。」と設けられたものであるそれは、何によって名付けられるのか。

このように、『〈プトガラ〉として世俗名称を付けられる因（理由）は、視る（もの）等であるが、それがもし、それらより前に留まる様相として存在すると考察すれば、その時には壺と絨毯のように、視る（もの）等に相互関係したことが無くなる。しかし、自らの因に相互関係が無いものは無因であり、財宝等に相互関係しない宝持ちのように、無いのである。』と御考えになられた。

取る者が、取られる対象一切の以前に有ることを否定する＞

[取る者が前であれば、取られる対象に留まる拠所が無いことで否定する]

他にも、

視る等が無くとも、
 もし、それが留まるとなれば、
 それが無くとも、それらは
 有ることになると、疑いはない。 4

もし、『視る（もの）等の以前に存在する〈プトガラ（人）〉というものが、視る（もの）等を近く取ることをする。』と思えば。

そう見れば、疑い無く、これら視る（もの）等もプトガラ無くして有ることになる。このように、財宝と関係する以前に祭祀は財宝より別に居ることになって、それぞれに成立し別存在となった財宝を収集するが如く、近取者においても、自らより別存在になった視る（もの）等の近取が有るとなるものである。

「（それは）あり得るのでもない。」と説かれたのは、

何が何者を明らかにしようか。
 何者が何を明らかにしようか。
 何も無い何者かが何処にあらうか。
 何者かが無い何かが何処にあらうか。 5

という一ここで「これはこの因であるが、これはこの果である。」というように、「種子」という因が、「芽」という果であるものを顕現させ、その果によっても、「種子」という因であるものを顕現させるが如く、もし「この者は、これの近取者である。」という、視る（もの）等何らかの近取の我であるものを顕現させ、「これは、この者の近く取られるものである。」と、或る我が視る（もの）等何らかの近取を顕現させるとなれば、その時、互いに相対して「近取」と「近取者」が成立したとなる。しかし、近取者無くして別個に視る（もの）等を承認する時には、拠所が無いので、それはまさしく無いのである。それ故に、二つとも成立したことは無いので、「視る（もの）等より別に、近取者は留まるのである。」というこれは、正しくない。

他派が考察した我を否定する>取られる対象それぞれの以前に有ることを否定する> [対論を述べる]

ここで言う。「『視るや聴く等や、』等を言ったことに対して述べよう。もし、『視る（もの）等一切の以前に留まる。』と承認したとなれば、この過失となるけれど、或る時、

視る等一切の
以前に何かがあるのではない。

ならば何かといえ、それぞれの以前に有るのである。そう見るのである時、

視る等の中から他の何かが、
他の時に明らかにする。 6

「視る者」であると視る（もの）が明らかにする時、聴く（もの）等に依拠して近く名付けられるのではない。それ故に、先に述べた過失が当たる機会は無い。」といえ。

取られる対象それぞれの以前に有ることを否定する> [それを批判する]

この説も正しくはない。何故かといえ、視る（もの）等と離れたものは近取が無い。明らかにするものと離れた無因であるものは、実在ではない故である。

視る等一切の
以前に、もし有るのでないならば、

—そのように考察すれば、そう見るとしても、

視る等それぞれの
以前に、それが如何様にあるか。 7

一切の以前にあるのではないものは、それぞれの以前にも（有るの）ではなく、例えば、樹木一切の以前に森が無い時、それぞれの以前にも無く、一切の砂に胡麻油の抽出が無ければ、それぞれの砂にも胡麻油は無きが如くである。

他にも、それぞれの以前に有るとなるものは、一切の以前にも有ると承認したことになる。（何故ならば）それぞれ以外に一切は無い故である。それ故に、「それぞれの以前に有る。」ということとは正しくない。

この故によっても、正しくはない。何故ならば、

視る者そのものが、聴く者であり、
もし、感受する者もまさしくそれであるならば、

その時、

それぞれの以前に有るとなるが、

『視る者』であるそのものが、『聴く者』である。」と述べることは、正理でもない。もし（正理で）あるならば、その時、視る行為と離れた「聴く者」も、「視る者」そのものとなり、聴く行為と離れた「視る者」も「聴く者」となるが、「視る行為と離れたものも『視る者』となり、聴く行為と離れたものも『聴く者』となる」というようなことは、見られもしない。まさしくそれ故に、

それはそのように、正しくはない。 8

と説かれた。それぞれの行為において行為者は別である故に、「これがそのように有ると、何処でなろうか。」と示す為に、

「それはそのように、正しくはない。」

と説かれた。

阿闍梨仏護は、

「我が一つであるならば、他の根（感覚器官）に移動する背理となり、
士夫が他の窓へ行くが如くである。」

と説明された。

阿闍梨清弁は、

「一切において存在する我については、他の根（感覚器官）に移動することが有るのではないので、背理となる過失は適正ではない。」

と、それに批判を述べる。

これは正しくはない。（何故ならば）自派（仏教徒）が考察したプトガラについての言及を否定する場合である故と、それも、（我は）一切においてまさしく存在すると承認していない故である。それ故に、背理となる過失はまさしく正解である。

あるいはまた、斯くも説かれた過失を斥けたいと望み、

もし、視る者が他そのものであり、
聴く者も他で、感受する者も他であるならば、

一考察すれば、それも正理ではない。そのように主張すれば、

視る者が有る時、聴く者となる。
我も、まさしく多数となるだろう。 9

黄牛より別他となった馬は、黄牛が有る時、一緒に存在するとならないのではないが如く、もし、「聴く者」が「視る者」より他となったならば、それは「視る者」が存在する時にも一緒に有るとなるものであるが、そのようには主張しないので、他そのものは有るのではない。

他にも、そう見るのであれば、我が多数となる。（何故ならば）「視る者」と「聴く者」と「感受する者」等は、それぞれ個別に成立したと承認した故である。それ故に、「プトガラ」というものは、視る（もの）等それぞれの以前にも何ものも無い。

他派が考察した我を否定する > [取られる対象一切の以前に有る理由を否定する]

ここで言う。「我は、視る（もの）等一切の以前にまさしく存在する。もし『仮にそれが有るならば、それは何ものが名付けるのか？』と思えば、それに述べよう。このように、視る（もの）等の以前に名色の時点で、それより順次に、

『名色である縁によって六處である。』²

という、視る（もの）や聴く（もの）等が構成されることになる四大（四つの

² 「名色…である。」：『稲稗經』より。

十二縁起の第四「名色」と、第五「六處」について述べている。

構成要素) が有り、それ故に、視る (もの) 等の以前に、四大の実質因を持つ
我は有る。」

そう見るとしても、

視るや聴く等や、
感受する等も、
それより変化する、その大においても、
それは有るのではない。 10

「大 (基本構成要素) であるものより生じる、視る (もの) 等のそれらにお
いても、基本構成要素の因を持つ、この近く取るものが有ることは正理ではな
い。前述した理由によってである。」と御考えになられた。それについて斯くも
前述で、

「何も無い何者かが何処にあらうか。何かが無い何が何処にあらうか。」

3

と説かれたその通りに、ここでも述べたまえ。

もし、実質因である大 (構成要素) の以前に我が成立したとなれば、それが
大 (構成要素) 等を近く取ることになるが、そのようでもない。(何故ならば)
無因である故である。有るのでないものが、如何様に諸大 (構成要素) を近く
取るとなろうか。それ故に、視る (もの) の近取を持つもののように、大 (構
成要素) の近取を持つものについても、まさしく過失を述べたのであるので、
再度述べることはしていない。何故ならば、そのようである故に、これは、諸
大 (構成要素) にも有るのではない。

それを批判する > [それによって近く取られる対象も本質として有ることを否定したと示す]

ここで言う。「仮にまた、そのように我を否定はしたけれども、しかしながら、
視る (もの) 等はまさしく有るのである。(何故ならば) 否定をしていない故で
ある。壺等、我の本性ではない諸物においては、視る (もの) 等と関係が有る
のではない。それ故に、それらと関係を持つ我は、存在するのみである。」

述べよう。もし、視る (もの) 等そのものが有るならば、我も有るとなろう
が、有るのではない。「或る我の近く取るものである、その視る (もの) 等は無
い。」と示した時、「近取者である我が無ければ、視る (もの) 等近く取られた
諸物が、まさしく有ると何処でなろうか。」と説かれたのは、

3 「何も…有ろうか。」: 『根本中論』第9章 5偈。

視るや聴く等と、
 感受する等も、
 所有する者が、もし無ければ、
 それらも有るのではない。 11

といい、「視る（もの）等は、或る私の所有であると考察されるそれ（我）が、『無い。』と説かれたその時のみに、その視る（もの）等も無いのだ。」と明らかに示されたのではないのか？それ故に、視る（もの）等は無いために、我は無いた。

それを批判する > [近取者が自性として無いことに対する反論を斥ける]

ここで言う。「何？『我は無いた。』と、そのように君は確信したのか？」

そう誰が言った？

『視る（もの）等は無いたので、我も無いた。』と、直前の背理において言ったのではないのか？」といえは。

そう我々が言いはしたけれども、この意味を、君が正しく決定していないのである。何故ならば、「事物の本性を持つ我は有る。」と考察されたのであるが、それも自性として有るのではない。吾輩も、正しくない誤りの対治として、それに対して本性であるとする頭かな執着を斥ける言葉を言説したのであるが、この事物が無いたと考察したのではない。このように、この二つは捨て去るべきものであり、事物に頭かに執することと、何ものも無事物であると頭かに執することである。

斯くも阿闍梨聖提婆が、

「君の我であるものも、私の我ではない。然れば、我は確定が無いた。それ故に無いた。無常である諸事物に、『分別』というものも近く生じる。」⁴
 と説かれた如くである。

まさしくそれを示す為に、

⁴ 「君の…生じる。」：『四百論』第10章3偈。「君の我であるものは、私の我ではない。然れば、それは我ではない。不確かな故である。無常である諸事物に、分別が生じるとなるのではないか？」（パツァブ訳）

何か、視る等の、
 前と現在と後に無いものは、
 それについて有る・無いという、
 諸分別は退くとなる。 12

と説かれた。先ず、視る（もの）等の以前に、我は無い。（何故ならば）それと離れたものに存在そのものが無い故である。視る（もの）等と一緒にとなったものも無い。（何故ならば）各々に成立していないものに共時性は見られない故と、二本の兎の角のように、互いに無関係の我と近く取られる対象も、各々に成立していない故に、現在にも無い。後にも無い。このように、もし、視る（もの）等が先に有ることになり、我は以降の時間に有るとなれば、その時、後に現れるとなるが、それはそのようではない。（何故ならば）行為者の無い業（行為）は成立していない故である。

ある一つの我を、そのように尽く考察したならば、視る（もの）等の以前か、後か、一緒に有るのではない時、認識されることの無いその本性についてまさしく有る・無いと、知恵のある誰が考察しようか。

それ故に、「近く取るものと近取者の二つは、業（行為）と行為者の如く、まさしく相互関係して成立したのであるが、自性として（成立したの）ではない。」と落ち着く。

ブトガラ（人）が本性として成立したことを否定する＞ [了義の教証と合わせる]

まさしくそれ故に、世尊によっても『三昧王経』より、

「その時、悪業無く十力を具えた、その勝者はこの最高の禪定を説かれる。有（輪廻）の衆生は夢のようであり、ここに誰も生まれず、死ぬことは無い。有情である人や、命者も見出さず、これらの法（現象）は、水面の泡や浮き木に似ている。幻のようで虚空の稲妻に似ており、水面の月に似て逃げ水の如くである。幾らかの人がこの世間でも死んで、他の世間へ移行して行くことは無いけれども、為された業はいつ時も無駄にはならない。輪廻であろうとも白黒（の業）の果は熟す。恒常としてではなく、断滅するとならず、業を積んだことは無く、留まることも無い。それも、為して（結果に）触れるとならないのではない。他者が為した（業の結果）を（自らが）感受することも無い。移行することは無く、後に再び来ることは無い。一切は有るのではなく、無いのでもない。ここで見解の在処に入り込むことは、清浄ではない。有情の行いは優れて寂靜であり、入り込むことは無い。」

「如来の享受される境である、勝者の功德とは、無生、寂静、無相の居処である。力と諸々の陀羅尼と、十力の力。これは仏陀が迦楼羅の如くである最高の性質である。」

と、詳細に説かれた。

プトガラ（人）が本性として成立したことを否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた顕句より、「宿住（前世での住）を考察する」という第九章の解説である。

DECHEN 訳